

巍山古城（南詔国発祥の地）

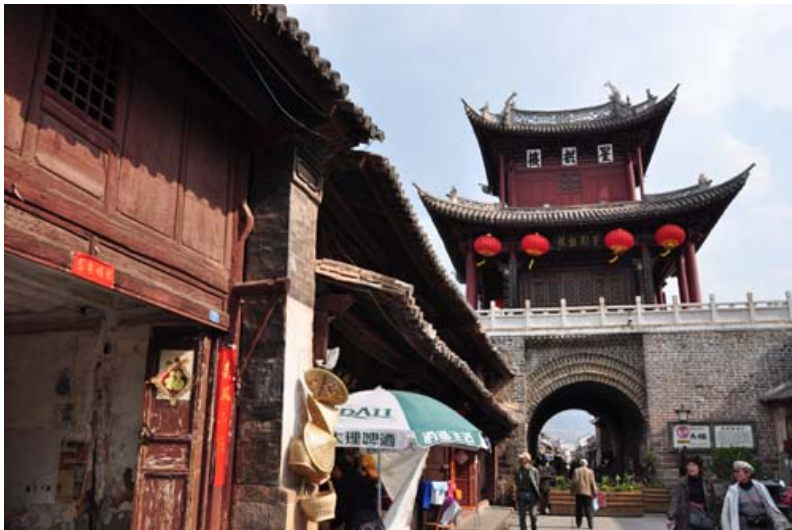
巍山古城は大理から南へ 54 km離れたところにある。茶葉の生産地シーサンパンナから大理を経て北へ向かう茶馬古道が通過している宿場街の一つである。



巍山はイ族回族自治州になっている。雲南省の中でも古い歴史を有するこの古城は歴史文化名城に指定されている。人口は 15,000 人位、海拔 1700m と資料にある。

現在の町の中心が左の写真の「拱辰楼」のある拱辰門の建物になっている。

巍山県城は明代 1390 年建立で、約 2km 四方の外壁に守られ、東西南北に門があった。今残っているのは北門のこの拱辰門だけになってしまった。



門の中に入ると県城の古い町並みが残っている。その中心が左下の「星拱楼」で、これを中心にして東西南北に街道を配し、十字型街道と呼ばれている。石畳の街道の両側には宿や商店、食堂が並び、往時が偲ばれる。

明代の建立となると南詔国とそれに続く大理国がフビライの元に滅ぼされ、それに取って代わった明の朱元璋が 30 万人の漢族を南京から雲南省に強制的に移住させた後になる。

なんとなく江南の古街に似ているのは当然のことかもしれない。

この地は南詔国発祥の地といわれている。南詔国と大理国については日本の教科書にも載っているが、興味を持つことなく殆ど忘れてしまっている。今回旅行するにあたり、雲南省の歴史を調べてみた。その概要を手短かに記しておくことにする。

雲南史のあらまし

雲南省は人類発祥の地の一つといわれている。1500 万年前と 800 万年前の猿人の化石、それに 170 万年前の直立原人の歯が発見されている。この元謀人はアジアで最古の人類として注目されている。

新石器時代の 4400 年前には籾殻の化石と農耕跡が見つかり稲作文化の発祥の地と言われたが、その後湖南、江西省の長江中流域でそれより以前の籾殻化石がつけられた。日本への稲作の伝播はここから江南の呉か越を通じて朝鮮半島、或いは南方ルートで入ってきたというのが現在定説になっている。

戦国時代末期に長江中流の大国楚が攻め入って「滇国」をこの地に築く。秦の時代、国家事業として雲南にも道路整備が行われた。漢の武帝の時代、「滇国」が入朝して「滇王金印」を授かる。これは日本の志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印と大きさも印綬の形も同じものである。倭と同等の扱いを受けているが、当時の絵図によると倭の使節より先に描かれているらしい。海を隔てた倭より陸続きの滇の方が大事に扱われていたのだ。また武帝が昆明族を攻めるために都の長安に水軍の訓練用に大きな池を掘らせ、「昆明池」と名づけたのは有名な話である。

後漢の時代、四川の蜀で採れた絹が通る道として重要視され「南方シルクロード」と呼ばれていた。三世の三国時代、蜀の諸葛孔明に攻められ、蜀の版図に入る。

六世紀から七世紀初期にかけて現大理の北にある大きな湖「アール海」(サンズイ偏に耳と書く)のほとりにイ族を中心にした六つの国が出来た。「六詔」である。ちなみに詔(チャオ)はタイ語で王の意味である。その詔の一人、現巍山の東南 13km のところにある巍宝山(2550m)近くで耕牧していた一番南にいた詔が統一したのが南詔国である。738年から902年内紛で滅びるまで13代の王が続いた独立国であった。最盛期にはタイ、ミャンマー、ベトナムにも勢力を伸ばしている。その後短命政権が数代続いた後、チベット系ペー族が大理国を建設した。937年から1253年まで、22代の王が続き、元のフビライに征服され雲南省での独立国家の歴史はこえて終焉する。そして、元の支配下に入った時期にタイ族、ラオ族、ビルマ族が南下してそれぞれ、東南アジアに住み着いていった。タイ国の歴史には大理国から南下してきて建国したことが記されている。その後、元に代わった明が30万人の漢族を南京から移住させたのは前に話した。これが最初の漢族の大量移入であった。

巍山古城も大理古城もその後の建立である。それ以前の南詔国や大理国がどんな状態であったかについては残念ながら分っていない。

清末期から利権獲得に英、仏、それに日本がビルマから侵入したり、日中戦争で蒋政権が行政機関や大学を昆明に疎開させ、第二の漢族大量移入があったりした。その後新中国として開放されて現在にいたっているのは衆知のことである。

巍山古城の街並み

古城街はそれ程広くないし、方形で縦横の道なので迷子になることもない。古い建物もよく残されているし、人々も素朴な感じがして親近感がある。まだ観光客も少なく、街全体が日常の生活感あふれる場所になっている。



街の中を歩いているのは日常の買い物客や若者連れが殆どで観光客らしいのは我々だけだった。近郷の村から買い物や遊びにきた人たちである。

まだこの街は広く知られていないし、大理に来る観光客は方向が違う世界遺産の「石林」の方を



右の写真は前方に「星拱楼」が見えているから十字型街道の一つである。この街のメイン道路だ・石畳の道とその両側に歩道もきちんと整備されている。電柱も高い建物も無く、古い木造の建物が両側に並んでいる。まるで映画のセットでも見ている気分がする。中央のリヤカーはごみの収集をしている。

「星拱楼」が古城の中心で、その界限と路地に入ると、この街の色々な姿が見えてくる。



優先するのだろう。中国国内の旅行者らしい人も見かけない。

ぎっしりと並んだ建物には日本の商家に良く見かける装飾と防火を兼ねた「卯建ち」がある。

左の写真のオート三輪はタクシーである。この街中では乗用車はあまり見かけない。

時間に限りがあるので、全てを見て回るわけにいかないが、路地を含めてみて歩いた。

路地に入ると道は狭くなる。地元の人たちの買い物で賑わっていた。おそらくこの路地の先に住宅地



があるのだろう。買い物を済ませた人たちがそちらの方に向かっていて、山が見えているが或いは南詔国発祥の地はあの麓なのかもしれない。



この辺は住宅地と思われる。乗り物はオート三輪かバイクである。写真左の右に店舗らしきものが有るが看板が消えていてわからない。



写真右の中央にある建物は緑色の看板の清真の文字がある。回族の料理屋だ。ここはイ族回族の自治州になっている。このあたりに回族が住んでいるのかもしれない。モスクを探したがそれらしい建物を見つけられなかった。左にあるプレートが街の案内板である。



露天の食堂街があった。屋台村といったところだ。家族連れが結構入っていく。写真右は古城街を少し出た場所である。前方に新しい町が見えている。赤い乗り物は表示からみて路線バス(ワゴン車)だ。新市街からここに来る人たちに利用されているものと思われる。

